

アブデュルヴァッハブ・オクタイとその周辺

——1950年代を中心に——

小野 亮介

発表に先立ち、発表者がインターネットで見つけた画像を例に、トルコや中央アジアのトルコ系の人々にとって汎トルコ主義への憧れが未だ過去のものではないことを紹介した。本発表は、トルコ民族主義者の一例としてアブデュルヴァッハブ・オクタイという人物を取り上げ、ロシア帝国・ソ連からトルコ・ヨーロッパへ亡命した人々の活動や第三者との関わり、コミュニティ内部の状況などを考察することを目的とした。亡命ロシア・ムスリムや彼らの組織を対象とした研究では近年、史料としての書簡の重要性が高まっている。本発表でも、発表者がトルコ留学中の2011年に偶然購入したオクタイの書簡群を史料として利用している。

アブデュルヴァッハブ・オクタイ(1904-1968)は、1922年にドイツに留学しその後産婦人科医となった。同時にトルキスタン民族同盟(TMB)の指導者であるムスタファ・チョカイを補佐した。1939年にトルコへ帰化し、後に自身の診療所を開業している。オクタイは研究史ではほぼ無名の人物だが、チョカイやその後継者ターヒル・チャータイを補佐だけでなく、医師として得た収入をコミュニティに投じており、決して過小評価されるべき人物ではない。

発表では彼に宛てられた書簡を中心に、1940年代後半以降、とくに50年代における在トルコ・トルキスタン人亡命コミュニティ内外の状況を検討した。最初の事例はフィンランド・タタール人との交友である。友人2名がオクタイに宛てた書簡からは、ドイツ留学時代に築かれた人的ネットワークがオクタイのトルコ移住後も維持され、それを通じ比較的裕福であるオクタイに様々な依頼がなされたことが伺える。またヘルシンキ以外の地方都市におけるタタール人コミュニティの状況も述べられている点は興味深い。

他の亡命組織と同様、TMBはかつてポーランドの支援を背景に機関誌を発行していたが、第2次世界大戦とチョカイの死去によって出版活動は停滞に追い込まれていた。TMBは組織再編の試みとして1953年に雑誌『トルキスタン』を発行する。アダナのトルキスタン移民がオクタイに宛てた書簡では、オクタイが資金や運営の面で多大な貢献を果たしたこの雑

誌を手がかりとして、トルコ内外の亡命・移住者との連携が深まることへの期待が述べられる。しかし同じ書簡は「TMB 問題」にも言及しており、TMB より広いプラットフォームが求められていたことがわかる。

オクタイの親友であったサアデト・チャータイの書簡は、彼女の父で、イディル・ウラル・コミュニティを長らく指導したアヤズ・イスハキーが亡くなる直前の様子を伝える。サアデトはオクタイを医師として信頼しただけでなく、イディル・ウラル・コミュニティへの不信感をも打ち明けていた。またイスハキーの支援者からの書簡を取り上げ、トルコの公務員規定が後継指導者の選定に影響を及ぼしたことを明かした。

発表の最後に、アメリカの支援を背景として 1950 年代に様々な反共組織が組織されたミュンヘンでの会合を検討した。オクタイは TMB 代表として 1958 年の年次大会に参加し、ミュンヘン滞在中に妻とターヒルに書簡 5 通を送っている。これらの書簡からはオクタイが様々な亡命者のみならず、アメリカ人とも接触し、互いに好印象を抱いたことがわかる。またイディル・ウラル、アゼルバイジャンなどの亡命運動指導者らと共同で結成した「トルコ人戦線」としての働き掛けも確認される。

本発表が取り上げた事例は、オクタイがよき友人、支援者であったことを示すばかりでなく、出版活動やコミュニティ外部との接触によって TMB を再編、活性化させようとするオクタイらの試みをも伝えるものである。しかし彼らの活動はやがて限界を呈し、目立った成果を残すことはなかった。時間の都合で発表では詳しく紹介できなかったが、発表者が主な研究対象とするゼキ・ヴェリディ・トガンとの対立も解消されないままであった。オクタイ書簡群は亡命トルキスタン人コミュニティの諸相だけでなく、対立側からトガンがどのように見られていたかを示す資料としての価値を有している。今後は書簡群をさらに読み進めるとともに、パリのムスタファ・チョカイ文書と併用し、批判的な視点からトガンを検討することが課題となるだろう。

(慶應義塾大学大学院博士後期課程)